

湖の琴
水上勉

湖の琴

昭和四十一年九月二十日 第一刷発行
昭和四十九年一月二十四日 第八刷発行
著者 水上 勉

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

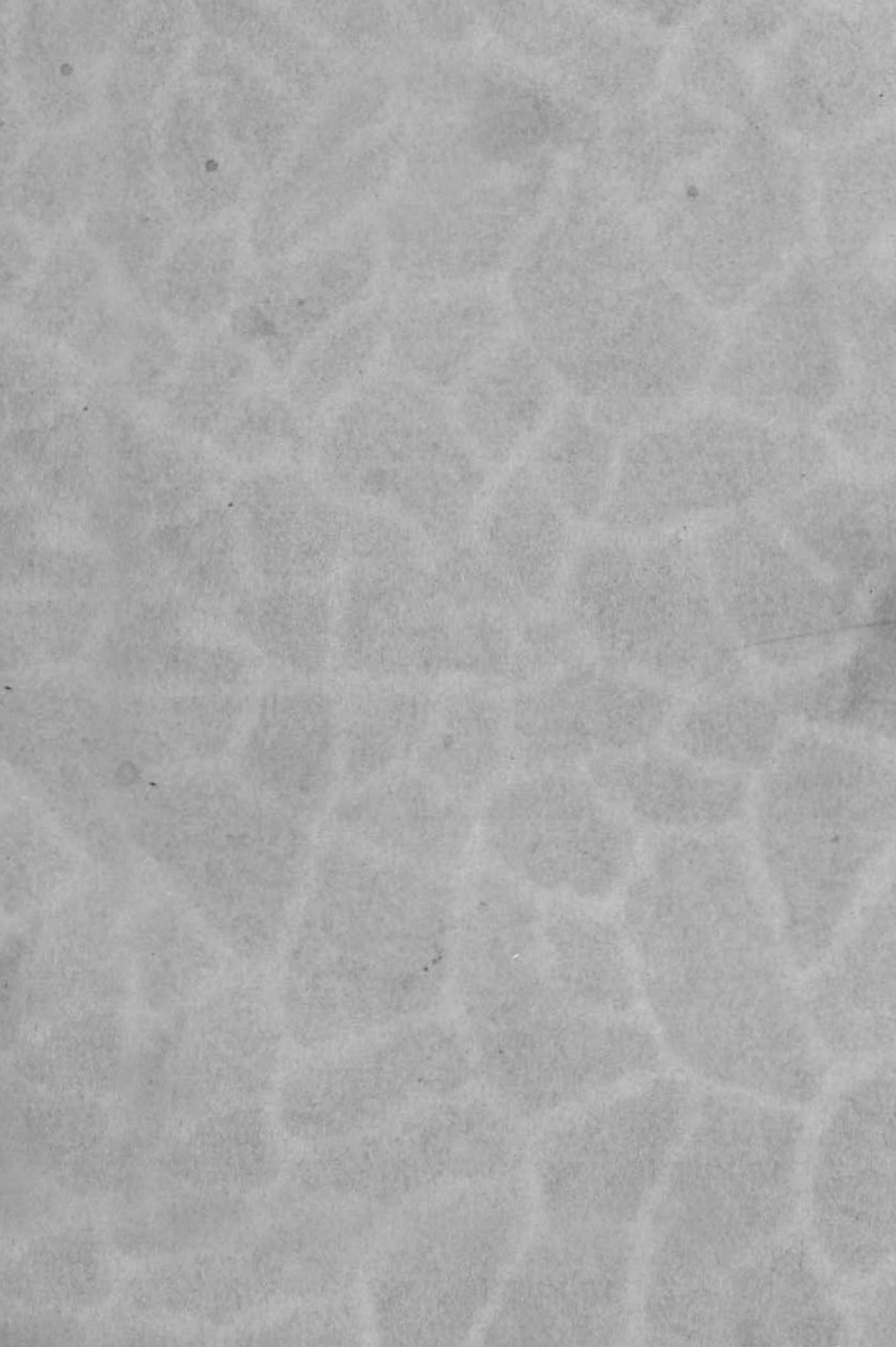
振替 東京三九三〇

印刷所 極東印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。
●水上勉 昭和四十一年

湖の琴
水上勉



一章

余呉の湖は滋賀県伊香郡余呉村にある。琵琶湖の北端にそびえる賤ヶ岳を越えて、約一キロ半ばかり、山を分け入った地点である。滋賀の湖といえ、誰もが琵琶湖を連想するから、北の山一つへだてた裏側に、ひっそりして在るこの湖のことを気にとめる人は少ない。最近になって、この余呉近くを本線が通るようになり、駅も出来て、観光客の姿もまばらにみえるようにはなったが、昔はほとんど訪ねる人はなかった。私（作者）がこの湖をたずねたのは、十年前のことで、私と同じ若狭の村を出た梅尾さくという娘が、余呉の近くの養蚕家に奉公にゆき、そこで行方不明になったということを耳にしたので、いったい、さくは、どのような村で働いていたのだろうか、見ておきたかったがためである。

はじめて見た余呉の湖は、暗く沈んでいて私の好みに合

った。というのは、若狭に育った私は、小さい時分から、琵琶湖のことを山の奥の暗い湖だと信じこまされていた。それは、若狭の国が山を境界にして、北の日本海へ落ちこんでいるためで、南の山奥を分け入ってゆくと、大きな湖があると教えこまれていたからである。方角としては、京、大阪に向う道であるはずだが、若狭の海辺からみると琵琶湖の境に壁のような山が立ちはだかっている。ところが、東海道路筋からみる大湖は、明るく広々としていて、岸には工場が建てこみ、大津、膳所、八幡など、ひらけた町並みがみえるので、失望さえおぼえたものだが、足の向くままに北の余呉へきて、私ははじめて少年時分の思いを達したといえた。

余呉の湖は四囲がすべて山であった。南から賤ヶ岳、大岩山、赤子山、行市山と、そんなに高くはないが、黒壁をみせた山々が重なりあって湖をとりまいていた。とくに、賤ヶ岳側は、峻しく切りたつて落ちこんでいて、波一つない鏡面のような湖面は、山影をうつして蒼光りしていた。そういえば、この湖には、山からそそぐ川がなかった。昔から湖底に湧き水があるといわれ、如何なる旱魃の年も水が涸れたことはなく、琵琶湖よりも水位が高いくちにもかかわら

ず、水は手を切るように冷たかった。

養蚕を営む農家は、この湖畔の山峽に点々としてあった。いま、手許にある「湖北風土記」なる書物を繰いてみる

と、
「余呉に大音、西山の二村あり。古くから繭をとり、糸をつむぎて、之を絃糸となす。国じゅうの琴糸、琵琶糸、三味線糸の大半を生産せり。大音糸、西山糸と名づくるは之なり。和楽絃糸として、琴二十二種、琵琶五十種、三味線百十種、その他あわせて百八十余種に及ぶ」

とある。いったいこのようなくれた湖畔の村に、絃楽器の糸の大半がつくられるということは珍しいといえる。何が原因でそのような糸がうまれたのだろうか。

若狭の梅尾さくが働いた養蚕家も三味線の糸をつむいだという。

もともと、桑畑の多い一帯であった。昔から、琵琶湖の東岸は生糸地帯といわれ、繭づくりのさかえた所で、長浜、彦根、木之本に、大きな製糸工場が林立していた。

「明治初年に至るまでは、湖北一円の製糸法は旧式なる手繰りと称し、鍋にて繭を煮、手車をまわして粗笨なる糸を製造したるに過ぎず。原料たる繭の品質極めて精良なる

も、生糸に至っては粗悪にして製品の市価も低廉なりし。

明治十一年彦根製糸法と称する製糸法漸く行なわれてより、十六、七年に至りて、各地に坐繰製糸場の開設をみる。即ち、川合村及び小山村に坐繰製糸練習所を開き、優秀なる教婦を聘し、子女にその操法を練習せしめたり」

と「湖北風土記」は伝えている。明治二十九年に、余呉の湖にもっとも近い町である木之本では、富田忠利という者が「木之本製糸株式会社」を起し、女工三百を算えたというから、これらの工場へ繭を売る農家は、百姓の副業として桑づくり、養蚕、製繭、糸繰りに精出したとみえる。しかし、それらの村から出された生糸は、概ね織物用もしくは、漁業用のテグスであったにかかわらず、賤ヶ岳山麓の大音、西山の二部落だけが和楽器の絃糸をつむいだのはなぜだろう。しかも、この二部落の糸が、日本国じゅうの邦楽愛好家たちの奏でる琴、三味線糸の九十%を占めたという。どうして、この糸だけが絃糸に適したのか。理由をたずねてみると、村人は「水が向く」「糸のセリシンが치가う」と説明するだけで、素人の私（作者）などには、さっぱり呑みこめなかった。水がかわれば、それだけ糸の肌にも変化があるとみえて、大音糸、西山糸の純白さは例をみ

ないという。しかも、昔からの伝習によって、手でねられる糸は、独自の太細のよりをもっていて、絃のひびきを美しくさせるにふさわしいという。他村の者が、いくら真似をして売り出してみても、大音、西山に匹敵する糸はとれなかったという。

げんに、私が訪ねた時にも、大音も西山も山奥の湧井戸の水を竹樋によって作業場へ誘導していた。埃ぬきにも、糸染めにも、すべて、この水をつかうらしく、山の傾斜からひっぱった竹樋が幾本も村の道に沿うて透明な水を運んでいた。わずかに二部落併せて百戸にみえない孤村だが、藁ぶき入母屋づくりの母家のわきに、細長い作業小舎をもっている。作業小舎の長いものは二十間もあった。すべてねり糸を屋内で陰干しするための小舎である。

家々はよその村より一風変わった風格をもって山かげにひっそりと静まっていた。若狭の梅尾さくのつとめた農家は、百瀬喜太夫という西山の旧家で、さくは、十六の時に栗柄の村を出、百瀬家に糸繰り見習として入っている。大正十三年の春のことである。

梅尾さくの生れた家は、私（作者）も知っていて、生れ在所の近くで「栗柄」といった。ここは、滋賀の山々に近

く、若狭でもたいそう南の山奥へ深く入りこんだ溪谷である。若狭は日本海に面しているけれど、栗柄のあたりへくると、もう、海よりも、むしろ、南の山をわけ入った奥の琵琶湖の方が近かった。

わずかに三十戸しかない部落だったが、「栗柄」の名は山に栗が多くて、どの家も、副業として栗を拾い、干し栗にして町へ売り出したことから連想してみても、栗山が多かったためかとも思われる。深い谷底へ、両側から山が落ちこむ斜面に、まるで、貝殻でもひつつけたみたいに、粗末な藁ぶき屋根や杉皮ぶき屋根の家がならんでいたが、耕地というものは少なくて、どの家も炭焼きを業とした。山で炭を焼くかたわら栗を拾ったのである。

さくの家には、父母と兄がいた。父親は伊右エ門、母をみん、兄を京吉といった。働き者で通った伊右エ門は、その年まだ四十歳で、冬も夏も炭を焼き、谷底の家へめったに帰ってこない生活をしていた。母のみんなが家にいて、一枚置けばかくれてしまいうる谷田に、わずかの稲をまきくったり、斜面の畑で、芋をつくったり、年じゅう腰をまげて働いていた。兄の京吉は、小学校の尋常科を出るとすぐ父親の炭焼きを手つだったが、さくは、その京吉と三つ

ちがいで、やはり尋常科を出てから十五まで母の許にいた。

このさくが、山をへだてた湖北の西山部落へ働きに出る縁となったのは、同じ部落から糸つむぎに出ていた加代という、さくよりは十歳も年上の女がいたからである。

琵琶湖の北へゆくと、余呉という村があるそう。その村には、小さな湖があって、手の切れるような水が湧いているそう。水のきれいな湖の周囲には、年じゅう桑畑を丹精して、繭をとる人びとがいるそう。人びとの口からきいた余呉の西山部落は、さくにしてみれば、都に近い村であり、そこでは、大勢の糸繰り女工さんが働いている。たくさんの給金をもらえる働き場だと想像されたのである。

加代が部落へ帰ってきたのは、例年どおり、栗柄の菩提寺である昌念寺の庭で、踊りが催される旧盆のことだったが、真紅の彼岸花の大咲きの柄模様の浴衣に、黄色いびかびかした太鼓帯をしめ、化粧した丸顔をにこにこさせて、さくの家の川戸をまたいだ加代は、折から芋の皮をむいていた母親のみに、

「おっ母ん、さくさんもおらと一しょに働かしてみんかの

……えらい西山は景気がようての……仰山の給金具れるでエ」

といったのが原因している。みんは、加代の見ちがえるほど女らしくなったずん胴の浴衣姿を眺めて腰をのびした。

「うちのさくも、銭になるだかや」

みんは問いかえしている。

「銭になるだかて……おっ母ん。仰山の日当をくだんすわの……うちらでも、三年目やけんど、一日に二十銭になる」

「ほう……二十銭にも」

みんはさくに似て下顎の細まった顔を心もちひきしめ、加代をみていった。

「でも、うちのさくはまんた、十五やし、仕事もおぼえとらん。そんな銭はとれんじやろ……」

「十五ならいっぱしや。西山には、十二、三から働きに來とつての女もおつてや……おっ母ん、長浜や木之本の工場にやの、十から糸繰りしとつてのひともおるで。十五なら、さくちゃん、もう大人じやろに」

大人だといわれて、母親は、正直なことを思いだした。

さくがその年の春に初潮をみていたことである。当時の十五といえば、さくはどちらかという晩生^{おくて}の方であつたかもしれない。初潮をみるとさくはめつきり女めき、みんな似て五尺にみたない小柄ながら、むっちりしたお尻も出てきて、鳩胸の乳房がこんもりふくらんできている。当のさくは、加代が洗い川をへだてて大声で話しているのを、家の戸口で野良着をつくろいながら聞くともなくきいていたが、

「さく、ちょっと、こっちへこんか」

と母親にいわれて、はじめて、加代のいる川戸の石に腰かけて、はずかしげに加代の顔を見あげた。

「いまな、西山にこんかいうて、おっ母んにいうたんや。

……さくちゃん、糸とりしとると楽しいえ……大勢の友だちもおるしの……にぎやかでの……こんな山の中に暮しとるより、なんぼかええかしれん……西山の糸は……おっ母ん……長浜や、木之本の工場とちごうて、琴やら三味線の糸や」

加代は下ぶくれの、心もち眉間^{まげん}のひろい顔をにっこりさせて、繭糸のように眼をほそめて、みんなをみた。

「おっ母ん、うちは、わるいことはいわんわの」

みんなの顔いろが少しずつかわってゆき、わきにすわっているさくが真剣に聞き入っているのをみると、心がうごいたのであらう。加代はしきりにさくが西山へくることをすすめるのだった。

「琴やら三味線の糸やらて……あんたア……西山はそんな糸をとってか」

「あいの……西山糸いうて、大音の糸とならんで……日本で有名な琴やら三味線の糸やな……工場の機械よりとちごうて、みーんな、手エでよる……仕事は、誰でも出来るわさ。かりやすいことやさかい、わたしら、奉公にいつて、半月目に繭とりは出来た……さくちゃんなら、惻巧やさかい、いっぺんでおぼえてしまふやろ」

きけば、西山は景気がよくて、糸をとれば、とるほどに売れゆきがよいのだそう。相場のかわらない炭を年じゅう山奥で焼いて、賃稼^{かせ}ぎしている伊右エ門の仕事にくらべると、夢のような話であつた。

事実、大正十三年から十四年にかけて、西山糸の需要は増え、景気がよかつた。加代の奉公先は、西山の岩田五右エ門といったが、ここには四人の糸取り女と、二人の男衆^{おとこ}がいた。岩田家だけでなく、のちにさくが働くようになって

た百瀬喜太夫の家も、農家であつたがいわゆる西山糸の屈指の製造業者である。どの家も手が足りない。近在の農家から尋常科を出たばかりの娘を傭い入れて、仕事を教え、糸取りや家事を手伝わせるのを習慣にした。いわゆる糸景気といわれて、日本海辺の若狭、越前の娘たちが、近江へ近江へと働きに出たのは、長浜や彦根などにある大企業の製糸工場もその働き場ではあつたけれど、中には、こうした山間地で、細々と繭糸を取る農家へ分散してゆく娘たちがいたのである。

加代が、栗柄の村の旧盆に帰ってきて、樽尾のさくを西山へ来させようと努力したわけは、ほかでもない、岩田と懇親にしていた百瀬喜太夫が、加代が働き者であることを知っていたので、同じ村に働きに出たい娘がいたら、つれて帰ってくれたのんでいたからであつた。西山だけでなく、大音や、木之本あたりでも、若狭の娘は評判がよかった。おとなしくて、律義者が多いという。朝早くから夜おそくまで性根をこめて働く。貧しい半農半漁の家で育ち、三どの喰べ物にも困るというような苦惨を嘗めてきている娘たちには、糸取り仕事など、気楽な部に入つたのだらう。どんな辛い仕事でも辛抱して働くのであつた。繭取

り、桑摘みはもちろんだが、忙しい時は、苗代田に入つた稲の刈り入れも手伝つた。そうして、月末にもらつた給金は郵便局に貯金し、これを嫁入り資金にする。そのような風潮が若狭の娘たちに流れていたのである。

一日に二十銭もの収入があるときいて、さくの母親は、眼を輝かせた。その夜、炉端にさくを座らせると、

「どうや、お前、加代ちゃんについて、近江へ働きに行つてみつか」

とさくの気持ちを打診した。

「うん」

とさくはこたえた。

「加代ちゃんとしよなら、うちは働きにゆく……加代ちゃんええ人やさかい……親切にしてくれはるやろ」

さくは、母親にそういつた。母親は、どちらかといふと、自分に似て小柄だし、人前に出て口もきけないような弱気な娘の性格を知つていた。だから、今日まで外へ出さずにいたのだが、加代がいるからには心配はないと思つた。大船に乗つたも同然だと思つた。

「加代ちゃんは働き者や。あの人の世話で働くのやつたら、まちがいはない。せやけど、お前はまだ十五やさかい

な。大人の仲間に入れるやろかと思うと、お母んは心配や」

「うちは、もう大人や」

とさくは云った。

「加代ちゃんに負けんように、琴やら三味線の糸取りする……うっちゃ、一生懸命働いて、お父に好きな酒吞ましたげる……」

じっさい、栗柄の村では加代の評判はよかった。尋常科を出てしばらく家の手伝いをし、心臓のわるい祖父が納戸で寝たきりでいたのによく看病もし、田畑に精も出した。

加代は十三まで家にいたというが、ふとした縁で、近江へ働きに出ることになると、そこでみっちり手仕事をおぼえて、十年も主家を変えず、今では、糸繰り女工の模範者となり、給金もたくさん持って帰ってきていた。加代の家は、梅尾の家より、子たくさんだったし、貧しさもひどかったのだ、その働きは目立っていたのだ。みんはそのような加代がさくをあずかってくれるのが嬉しかった。安心だと思った。ひょっとしたら、さくも、加代に負けぬ働き者になるかもしれない。もとより、さくは一人娘である。兄の京吉に嫁を貰えば、日を経ずして他所へ嫁がせねばなら

ない。炭焼夫の伊右エ門には嫁入り仕度など出来る才覚はないし、仕度もしてやれぬ嫁入りなら、わが家と同じような貧乏家へやるか、それとも、丁稚を終えたばかりの次男坊のところへやるかだろう。それとても、戸数の少ない村だから、さらにある口ではない。さくが近江へ行って働いた場合は、すべて、さくの貯金だ。将来のための金だと、母親は云いさとした。

「お前が稼いだ銭は、お前の銭や。うちは貧乏で、お前に嫁入り仕度をしてやれるような家やない。お前は精出して働いて、その分をお前のために残しておくれ。女の子は大きゅうなったら嫁にゆかんならん。栗柄の村のような、山奥におれば、嫁入口はたんとなない。広みの世間へ出るにかぎる。手仕事をおぼえて、精を出し、御主人さまにかわいがられるようになれば、ひとりでに嫁にくれという話もかかってこんとはかぎらん、働きにいったら、一生懸命……精出してな」

「……………」

母親のいうことをさくはうつむいてきいていたが、
「おっ母、うちが働きにいくいうたら、お父は怒らへんか」

と訊ねた。

「なんで、お父がお前が奉公に出るのを叱るやろ。お父は、朝から晩まで山の中で炭焼いとる……お前の奉公先を考えてくれるようなヒマはない。お前がゆくというたら、喜んでくれるやろ」

とみんはいった。

「さく、そのかわり、働いた銭は無駄使したらあかんぞ。月々、ちゃんと貯金をして……嫁入りの仕度をするんやぞ」

と母親はしつこくいった。さくの気もちがはっきりしたこと、母親は一町ばかり距^{はな}ってある山裾の加代の家へ走っていた。加代が喜んだことはいうまでもない。

梅尾さくは、翌年四月二十二日の朝、巢雲加代につれられて栗柄の村を出ている。その年は雪の多かった年でまだ、若狭の山奥には雪が残っていた。近江へぬける白い一本道の両側の山壁には、葉を落した樺^{カハ}の梢^{シノガハ}が針のように空へつき出でいて、肌寒い風が吹いていた。山は高く、空は蒼く澄んでいたが、奥へゆくほどに冷たかった。時どき、炭粉を散らしたように鵲^{つぐみ}のむれが鳴きわたるのがみえた。

栗柄村から、余呉へ出るには、一本道しかなかった。南

の奥に、赤坂山というかなり高い山がそびえていた。峠路へさしかかると、道はそこから滋賀県になった。いわゆる湖北街道といわれる今津と海津を結ぶ国道へ出る山道だが、峠道からだらだら下りの曲りくねった道を降りてくると、現今のマキノスキー場のある平坦な斜面のみえる山裾へ出てくる。北牧野、南牧野という戸数の少ない部落の、藁ぶき屋が点々とみえはじめると、早や琵琶湖の風が吹いてきていた。国道の蛭口へきて、加代は、路傍の「うどん」と染めぬいたのれんをくぐって入った。

「腹がへったで、さくちゃん、うどん喰お」

といい、凹凸のはげしい土間のあまり座り心地のよくない木椅子にならんで掛けて、店の子が注文をききにくると、

「きつね二つ」

とたのんだ。さくは、加代の物馴れた調子にかすかな羨望^{せんぼう}と怖気^{おそけ}をおぼえ、だまって、うどんのくるのを待っていた。やがて大鉢に山もりのうどんがきて、うす味の汁がひと杓^{しやく}かけた程度しかないのをすすっていると、こんなうまいうどんをたべたのははじめてだとさくは思った。うど

んは栗柄の干しうどんとちがって、水気があり、白くて太

かった。ふうふう熱い汁に息をふきかけ、鼻先にぬりたくった化粧クリームの上へ、汗の玉の出るのもぬぐわず、加代は汁一滴ものこさずたべた。やがて加代は刺繍しゅうのしてある財布をとり出して、小銭を払うと、

「さ、早よゆこ、早よゆかんと、晚げになる」

といつて、海津へさして急ぐのであった。海津については正午近い時刻であつた。道はこらあたりから、湖岸に沿いはじめて、南湖畔では想像も出来ないような断崖や、切りたった島の見える風光美しい場所へくる。常緑樹の繁茂した山裾が、ずり落ちるように湖へ激しくおそいかかる大崎寺の休み場から、九十九折つづらの樵道せうどうを登つて、岬の鼻をまがりかけると、大浦の深い入江がえぐれてみえる。波一つない青い入江に、弓の矢型に割箸を組み倒したような、異なものが見えたので、さくは不思議そうに眺め入った。

「あれは、臥ふしや」

と加代は教えた。

「こころあたりの漁師さんは、狡こつるい魚のとりかたをしやはんのやな。棒みたいにみえるのんは、竹網の張つてあるてっぺんやな。魚が泳いでて、ひとりでに、竹網にそう

て、先の矢型の中へつれこまれてしまうように出来たある。魚がいっぱい入った頃見はかろうて、漁師さんは、舟にのつてな、矢型のわきへいつてタモで掬いとらはるんや。鯉こい・鮎あな・モロコ・鮒ふな・鰻うなぎ……ぎょうさん魚がとれるんやでエ」

さくは、琵琶湖の広さにいま眼を瞠みっている。山奥にある遠い湖だから、きつと、暗くて沈んだような湖水にちがいないと思つていたものが、なんと、舟で漁をするほど広いという。いま、葛籠尾崎の鼻に牛が寝たような竹生島もみえて、その向うは乳色にかすんだ東岸だった。海のように湖は広がった。

「加代姉ちゃん、大けな湖やなア。若狭の海とちつともかわらへん」

はじめてさくが云つた言葉はそれであつた。

「でもな、さくちゃん、わたしらのこれからゆく余呉の湖は、こんなに広いことはあらへんえ。小っちゃい湖や。まるで沼みたいな、ふかいとこや。そのな、こっちべたの山の下に西山があんのやけど。桑摘むじぶんがくると、何ばでも余呉の湖を見にゆけるわいな。琵琶湖よりも、おとなしゅうて、美しい湖や」

加代はそんなことをいい、やがて、大浦をすぎて、ひと山越せば塩津だという登り道へくると、さくがこれから奉公しなければならぬ先の百瀬家について、かんとんに説明しはじめた。

「うちの働いてンのは、岩田さんいうてな。やっぱし、西山では指折りの資産家やけど、百瀬さんの家から、岩田さんに負けん大けな家やな。母家やら作業小舎があつてな、繭小舎だけでも、栗柄のうちの家よりは大きいほどや。瓦ぶきの大きな屋根のある小舎や。その百瀬さんとこに男衆が一人と、女工さんが二人いやはる。あんたがゆくと、都合四人になるわけや。女工さんはまんた若い人やと思うたが、わたしらとも時々顔をあわすことはあるさかい、顔はおぼえてるけど、名前は知らん。なんでも、敦賀の方からきとつての人やそうな。あんたは、百瀬の家へいったら、まず、その人たちと仲好うせんらん。一しょに寝て、一しょに起きて、毎日仕事を教えてもらうのやさかい、古い人のいうことはよう聞かんらん。でも、蚕飼いはそないにむずかしい仕事やあらへん。いちばんむずかしいのは糸取りやけど、これやかて、足で踏めば、糸車は勝手に背中であわってくれるし、簞の先で、繭の肌をかい

やると糸口は自然と出てくる。出て来た糸口を手であわせ、より金の端にひっかけてやると、糸は勝手に生きものみたいになわさってくるんや。あとは、琴やら三味線の糸にする独楽こまより、ぐらいがむずかしいかもしれんけど、それやかて、古い人らが一生懸命やってはんのを真似たらええ。さくちゃんは器用やさかい、すぐにおぼえてしまう」

加代は、西山が近づくにしたがつて、さくがいつそう無口な表情となり、気怖きふじしてくることがわかると、そんなことをいって、百瀬の家が、如何に働きたい所であるかを強調するのであった。

さくは、心もとない顔で聞いていたが、大浦から、八田部の山峽やまがきへ出て峠をつつ切り、月出の浜が右にみえだすと、

「加代姉ちゃん、若狭の栗柄はどっちゃやろ」

ときいた。加代は急に涙ぐみ、北の方に、壁をたてかけたように煙ってみえる山を指さした。

「栗柄は、あっちゃやな。遠うなつてしもた。お母ちゃんも、お父ちゃんも、今頃はあんたのことを案じてはるやろ。みてごらん。あれが赤坂や」

栗柄の家からみた赤坂山は高く近かったけれど、湖北の

岸からみると、重なりあった乳色の山と山の重なりに向うで、それが、それなのかはつきりしない。

巢雲加代が、樗尾さくをつれて、賤ヶ岳を越えたのは、四時すぎである。すでに、西山の部落には、夕色が落ちかかっていた。この部落だけ、賤ヶ岳の真下にあつて、木之本に至る湖北平野のどんづまりなので、背中の山へ陽が落ちると、すぐ暗るのであつた。四時ならば、まだ木之本の町屋根は、西陽をうけて光っているはずなのに、部落はずでに暗かつた。

飯浦から九十九折の山道を越え、峠からだらだら坂を曲折して降りると、道を境いにして、北に大音、南に西山が振り分けられ、百戸の家は分散してゐた。西山のかかり口は、街道の野尻平太郎の作業小舎からはじまつた。野尻の小舎から、順番に、埴川、西村、青木といった風に家が、山背へむけて勾配に軒をつらねてゐた。どの家も、いまは苗代がはじまるので、農繁期といえたわけだが、村半分は、春蚕の飼育の最中であつた。早や、部落へはいるとふんと繭の匂いがあり、灯のついた家や、小暗い家やが、入母屋三角型の屋根穴から、乳色の煙を吐きだしている。藁と茅とをとりまぜてふいた屋根は、大小あつても、どの

家も同じ型で、傾斜が激しいのは降雪のためだった。そういえば、まだ、賤ヶ岳の原始林へゆくと、冷たい雪が残っていたらう。毎年五月にならぬと雪は溶けなかつた。だから、西山へはいると、加代とさく顔に冷たい風が吹いた。

巢雲加代は、山を背に、まだふいたばかりの大屋根を、檜いろに染めて、立ち足はだかるように建っている、大家の前へくると、清水の流れる道傍の竹樋をまたいで、

「百瀬さあーん」

と高声でよんでいた。

「岩田の加代ですわいの」

暗い内側から応えがあり、やがて、戸口の障子があいて、手拭をかぶつた若い女が半身をのぞかせ、じろつと外をみた。

「あえ、あんたかえ、いつ戻ってきたんや」

若い声であつた。

「いまやア」

と加代はいい、

「御主人さんおつてか。加代が、栗柄から……女衆さんつれてきたというて下さい」

手拭をかぶった女は、じろりと加代のうしろを見た。桐尾さくは、夕景色の中で、古ぼけた柳の手提げをもったまま、ぼつんと佇んでいた。竹樋の水を加代のように、飛びまたいで、そっちへ行つてよいものやら、どうしてよいやらまごつているのであった。

「あの娘か」

と女はひっこんだ眼をむいた。

「そうや、あの娘や、うちの村のさくちゃんいうて……ええ娘やな、御主人さんに、早よ話してエな」

せかせるように加代がいうと、女衆はやがて、ぶるっと一つ頭を振って内側へ消えた。と、五十すぎの肥った親爺が出てきた。家の中なのに頬かむりしていた。まだ、春蚕の手入れでもしていたのか、戸口へくるなり、しゅっと鼻涙をすすって、

「お帰り、いまか」

と外のさくをみた。

「はえ、栗柄のな、さくちゃんいうてな……十六の娘おつれてきました……」

加代は陽気にいった。

「ほう」

と男は、太い眉をうごかして、すぐ笑顔になった。

「何か、お前、女衆をつれてきてくれたんか、そりゃ、ありがとう……こっちへお入りいうて……」

戸口から、表庭の隅に大きな雪隠がみえる。竹樋は、その裏を通つて、道傍の井戸へ水をはこぶ仕掛に出来ているのだが、そこで洗濯も、食器洗いもするらしく、枯れた竹をならべた露天の棚がつくつてある。いま、そこに伏せた茶碗や雑巾の上にかすかに陽がのこっている。

「さくちゃん、こっちイおいで、さ、御主人さんにあいさつしよ」

加代は走りもどつてきて、さくの手をとった。さくは、峠を降りる頃から終始だまりこくつていた淋しげな顔を、この時、かすかににつこりさせ、「ここやったん」と小さくいい、うしろから小走りに戸口へよつた。

「さ、あいさつおしいな」

と加代がいうと、さくは百瀬の主人に向かつて、

「栗柄のさくでございます。よろしゅうおたのもうします」

といつて、お辞儀した。

「わしは百瀬の喜太夫や……あんだ、働きにきてくれたん

かいの……嬉しや、嬉しや、まさか、加代ちゃんが春休み
に帰んでつれてきてくれるとは思わなんだ。夏蚕の忙が
しゅなる頃かとも思うとったが……こら……願ったりかな
ったりや。苗代もはじまるし、うちは、春蚕もうんと増や
したとこやし……みんな喜ぶじゃろ」

喜太夫は好人物にみえたけれど、どこことなく、如才の無
い物言いをした。抜け目のない鋭い眼に、濃い眉、やや低
い鼻、厚いくちびる。頬かむりを取ると、殊更顎骨が張っ
てみえるのであった。これが西山屈指の糸取り業者の風格
でもあったらう。加代とさくを、喜太夫はにこにこして、
お間とよぶ縁先側の部屋へ通すと、

「嬢ア、若狭から、女衆さんを加代ちゃんがつれて来たぞ
……さ、みんなよんでこい……みんなに紹介せんらん」
といった。さくは大屋根の板の間にすわった。煤けた張
り木の組みあわさった天井がみえる。黒い大柱が立ってい
る。障子も戸もうるし塗りであった。これが百瀬家へはい
った最初の印象である。梅尾さくは、この日から、百瀬家
の女衆の仲間になることになる。

喜太夫は別棟になっている表の作業小舎へ女衆と男衆を
よびにゆかせたがまもなく、先程戸口へ出てきた女が、も

う一人背のひくいすづまりの顔の十八、九にみえる娘と、
ひよろりと丈が高くて蒼白い顔をしたイガ栗頭の十八、九
の男をつれてきた。

「さくちゃん、あんたの友だちや。こっちがてるちゃんい
うてな、ヒキタから来てる娘オや（小柄な娘を紹介し）ほ
れからこっちが（とよびにいった眼つきのわるい女を指し
て）まあちゃんちゅうてな、越前から来てる娘オや。ほれ
から（男の子を指して）こっちは兼吉や。みんなまだ日が
浅い。というても、うちへきて二年になる兼吉がいちばん
古いんやけど……てるちゃんらは、まだ一年目や。この娘
らと仲好うして、一生懸命繭づくりやら糸取りしてもらわ
んならん。すぐに加代ちゃんみたいな熟練さんになるわい
な。な、加代ちゃん」

喜太夫は、加代の心もち疲れをみせている顔にへつらう
ような笑いを一つすると、うしろに立って、先程からじっ
とさくの方を瞞（くら）めている細君の鈴子へ、

「さくちゃん、ほてから、これが、わしの家内や。家内は
熟練さんやさかい……よう教えてもらわんならん、ええ
か」

といった。鈴子は鼻の低い、額のせまい顔をしていた。